



## INTERVIEW



一冊も読まなくていいよ  
いつかきつと出会うから

### 糸井重里

僕自身、「読まなくちゃ」と  
なるべく考えないようにしています

誰かが何かを考えた形跡が、地層のようになっているのが本屋だと思うんです。そこに立っているだけで、一冊も読まなくても何かが伝わってくる。この感じが僕は好きですね。例えば、よく行く本屋でも、普段行かないフロアに入ると「何これ？」と思うことがあります。このワクワク感とかドキドキ感が、本や本屋が持っている豊かさだと思うんです。読書好きの人がよく訪れて、本屋がクラブ活動のような場所になっていく感じも面白いですし、あまり本を読まない人でも、何かのきっかけに



糸井氏が代表を務める株式会社ほぼ日。「やさしく、つよく、おもしろく」を行動指針に、ウェブサイト運営、物販、イベント企画・運営など幅広い事業を展開している。

読み始めたらすっかり夢中になつていった、なんて話もよく聞きます。よく読む人も、読まない人も、どちらにも敬意をもって付き合ってもらえる本という存在は、やっぱりすごいと思います。

だから、若い人たちには「本をもっと読めばいいのに」とは言いません。逆に「一冊も読まなくていいよ」と言いたいくらい。そうは言っても、みんなきつとどこかで自分の一冊に出会うんじゃないかと思うんです。食事中、「よく味わって食べなさい」とか言わず、単純に「美味しいね」と一緒に楽しみ、語り合うような感じですよ。

僕自身も、読むことを義務にしないように心がけています。「読まなくちゃ」と、なるべく考えないようにしているんです。読まないかもしれない、読まなくてもいいやと思う、自分自身がのびとでできる空間をつくるには、買う本の量もストックもどんどん増えています。僕もいい歳の大人ですから、思うに任せて本を買っていて、しばらく置いたままにしたり、読まないと思う本を後ろに追いやったりしています。



でも、「あれ、あの本があったはずだぞ」と探しに行くこともありますし、そのことすら忘れて本を買っちゃったというの、たまにやっています。

読む本も、年を重ねるにつれて、ノンジャンルになってきました。大人が興味を持って読めるタイプの本って結構

あるんです。例えば、「ほぼ日」でも対談したんですが、鳥類学、進化生物学、人類生態学、地理学、文明史など、幅広い分野を研究し続けているピュリッツァー賞受賞の世界的研究者、シャレド・ダイアモンドさんの著書もそんなタイプで、僕は好きです。昔ほど小説が読め

なくなってきましたが、もしかすると時間をもつたないと感じているからかもしれません。若い時ですと、もてあます時間をドストエフスキーに費やしてもよかったのですが、今はそこまですで本気になって読んでいる時間がない。残念なことですが。

**本を真ん中に、  
話したり、交換したり**

人は、本からいろいろな考えを学んだり、勇気や希望をもらうことがあります。その本に出会ったことで生まれた思い出やエピソードなど、それぞれの想いも詰まっています。そんな、本を互いに持ち寄ることができる広場が作れたら面白いんじゃないかなと、何十年も前から思っていました。この長年の構想に、僕と同じ前橋市出身でメガネの「J・N・S」を経営する田中仁社長や前橋市が賛同してくれて、2022年10月に群馬県前橋市で「前橋BOOK FES」を初開催することになりました。

フェスとあえて名付けたのは、「本はあまり読んでこなかったけれど、楽しそうだから行ってみようか」と、気軽に来られるイベントにしたかったから。「あの人も参加しているの？」と振り向いてもらえるような賑わいを作りたかったんです。

今は、本の近くにいるような人ほど、行き詰まっているとか、停滞しているとか、本や活字に対してネガティブなことを考えがちです。そうではなく、本というものを巡って、もっと明るい物語が語れないものかという想いが、自分の中にいつもありました。本を真ん中に、本を読みたい人、本が欲しい人、普段あまり本を読まない人が集まり、それぞれが話したり、本を受け渡したりする。難しいことは抜きにして、楽しみとして、本や活字を組み立て直したいんです。フェスを通して、それができれば最高ですね。